



## 第 99 回（平成 26 年 7 月 9 日）定例会の研究発表要旨

## 北海道空襲と札幌

星置 菊地 慶一 氏

1945年7月14、15日の北海道空襲で、道庁所在地の札幌市は空襲はあったものの犠牲者1名と、被害は他の地区から見ると少なかった。

攻撃を受けた箇所は札幌村、丘珠飛行場。白石村、駅周辺。手稲村、軽川駅周辺、手稲金山の3カ所で銃爆撃を受けたものの被害は少なかった。

丘珠では飛行場付近に爆弾投下と機銃掃射をされ、飛行場に接する農家の主人が貫通銃創で亡くなられ、家族も負傷した。

白石では列車や建物が機銃掃射された。

手稲(軽川)では駅北側の日本石油の製油所の石油タンクに爆弾投下され炎上、3日間にわたって燃えた。手稲金山も機銃掃射を受けた。

しかし、これらの被害は米軍の臨機攻撃が、全道に渡っているのに比べると、なぜか攻撃された箇所が少ない。

悪天候が理由とされているが、7月15日の札幌の天気図から判断すると、「朝からモヤがかかり、時間によっては霧雨もあったらしい。しかし降水量が記録されるほどの雨にはならなかった」と考えられる。

北海道全体の天候も同様だった。そのためか空襲目標地に限らず、晴れ間を縫って広範囲の地区に攻撃が行われた。札幌は終日視界が開けなかったという幸運に左右されたと思われる。

だが、米軍の北海道攻撃目標の中には、工業資源の破壊とともに「戦意を低下させる」という点もあった。戦意低下から見ると、道民はただ1回の空襲で震え上がり恐怖のどん底に落ちていた。道都の街であった札幌を叩く効果は大きなものがあつたに違いない。それなのに視界が十分でないとはいえ、札幌中心街への無差別攻撃がなされなかった理由には、若干の疑問が残っている。

また、戦後北海道空襲の実態調査を道庁が行わないままにきたこと、札幌市の被害が少なかったことによって、空襲記録運動が広がらず、地方のものにしかかなり得なかったことに影響していると思われる。

(札幌空襲について補足しました)

・丘珠空襲で機銃弾で右手を負傷した人を、かつて札幌市に訪ねたことにふれましたね。網走市からやってきてようやく訪ねあてた人だったが、玄関口で対応され十分に話を聞くことができなかった。そのことに恨みがましい表現をしたこと恥じています。「今さらなにを、話すことはない」という気持ちは体験者の多くがかかえる心境であり、苦しみであり悲しみであることを、取材者や聞き書きをする者は意識しなければなりませんね。



## 札幌の交通信号システム

富丘 井塚 重男 氏



札幌市の交通信号システムはインターネットシステムと同様に電話回線で交通信号機、道路上表示機、監視カメラ、視聴覚障害者用案内放送機、歩行者用信号切り替え押しボタン装置交差点で右折表示機、自動車検知赤外線検知器が信号監視センターの各制御機器に接続され、信号機の赤、黄色、青の切り替え、右折指示制御等を行っている。監視センターには札幌市内の道路標示盤があり各道路の状態（渋滞、通行禁止等）の状況がリアルタイムで表示される。

センターの監視モニターには道路状況（降雪、降雨、吹雪）がリアルタイムで表示され、異常時対応の迅速化に寄与している。丁字路交差点に設置されている自動車検知赤外線検知機は自動車が真下にくると信号切り替え押し

ボタン装置の押しボタンを押したと同様の効果があり信号が赤より青に切り換わる。また、車道上に設置された自動車検知赤外線検知機は単位時間内で真下を通過した自動車台数を計測しており、単位時間内に自動車が移動しない場合、該当箇所のモニターへ渋滞表示を行う。交差点を通過する車両台数も計測しており、多い方の青時間を長くしたりする。

**道路上、または左右に設置された情報表示機には**

- 1・道路通行止め箇所、時間帯（月日、時間）
- 2・天気予報（暴風雨、洪水、雷、大雪等の各種警報）
- 3・各イベント情報（お祭りマラソン、賓客の訪問、デモ等による規制等）表示される。

**交通信号システムの大きな目的は**

- 1・交通事故の防止
- 2・歩行者の安全確保
- 3・交通渋滞の解消
- 4・交通渋滞の解消による公害（炭酸ガス、窒素酸化物）の削減である。

交通信号監視センターには監視員が複数名常駐して常時モニターの変を注視しており不測の事態に対応している。

**交通信号はプログラムにより作動しているので以下の変更が可能である。**

- 1・夏季と冬季夜間、夜間と昼間の青信号時間の長短の変更
- 2・暴走族暴走走行対応プログラムの設定（進行、左折、右折方向全て赤点灯）

**\* オマケ**

- 1・高速道路の非常電話（路肩に設置されている。）

\* 走行中の車の故障、他、路上に走行障害物を発見した場合、交通事故に遭遇した時等、電話機の送受話器を取ると自動的に監視センターに接続される。その後司令員の指示に従い対応する。

\* トンネル内の非常電話については高速道路の非常電話と同等の機能を有しています。

\* 高速道路の非常電話で多いのは、ガス欠、ワイパーの故障、路上の落下物の連絡等

- 2・高速道路で交通事故にあった場合

パトロールカー、救急車、消防車は車道の中央を走行するので左右路肩方向に車を移動すること、最初にミニパトカー、赤のバン消防車等が拡声器により車の移動を指示されるので指示にしたがうこと。

- 3・国道道路上に設置されている速度違反監視カメラについて。

機能は速度取締りで使用されるスピード計測器と同等と推測されます。カメラが動作しないように十分ご注意ください。・・・・・・

# 八利八起生

## ★ 文芸サークル

昨年の7月に宮崎駿監督の映画『風立ちぬ』が公開されました。当時、文芸サークルの例会で話題になりまして、堀辰雄の同名の小説とはどのような関わりがあるのだろうかという問題が出されました。その解答は野村氏にお願いしようということになりましたが、その前に小説を読もうということで、先月の例会で堀辰雄の小説について話し合いました。「日本文学鑑賞辞典」(吉田精一編集、東京堂出版発行)に書かれていた梗概を紹介して例会報告に代えさせていただきます。

「私」は夏の高原で節子という少女と知り合い、やがて婚約したが、彼女は胸の病を患っていた。節子はサナトリウムに入院することになり、四月下旬に、節子と彼女に付き添った「私」の二人は八ヶ岳山麓のサナトリウムに向かった。「かういふ山のサナトリウムの生活などは、普通の人人がもう行き止まりだと信じてあるところから始まってあるやうな、特殊な人間性をおのづから帯びてくるものだ」が、そういう環濶で、二人の「すこし風変りな愛の生活が拍始まった」。それは、「私の身近にあるこの微温い、好い匂ひのする存在、その少し早い呼吸、私の手をとつてあるそのしなやかな手、その微笑……」、そういったものを除くと、「あとには何も残らないやうな単一な日日」であるが、二人はそんなささやかなものだけで満足していた。それは「私がそれをこの女と共にしてある」という確信があったからである。やがて冬も深くなってから節子は死んだ。冬のK……村を訪れた「私」は人けの絶えた寂しい谷にある別荘で一人で暮しはじめる。そうした静かな暮らしの中で寂しさに耐えながら、リルケの『レクキエム』などを読んでいた「私」は、こんなふうに孤独で暮してられるのも「みんなお前のお蔭だ」と考え、節子の「愛」が彼女の死後も自分の中に生きているのをしみじみと感ずる。

なお、野村氏の『風立ちぬ』を語る(堀越二郎と堀辰雄)は11月に、『風立ちぬ』の映画鑑賞会は来年2月に予定しております。(小田 記)

## ★ 開拓史研究部

8月27日の例会では、村元氏の基調提言で「依田勉三(光と影)」について話し合う予定です。

## ★ データ整理部

先月から始めました「手稲歴史年表」のデータ入力順調に進んでおりまして、21日までには“大正”までできる予定です。

それに合わせまして今回のコンピュータ活用研修のテーマは「Excel データをWord 文書へ変換」です。関心のある方はご参加ください。

### 手 郷 研 ク イ ス

1■94年、前田利嗣侯が篠路村茨戸に前田農場を開きました。

■に入る数字は？

(ヒント：年表 P.16)

### 次回の予定

次回は、第100回記念として、特別企画で行われます。

日時：9月21日(日)13時30分～15時30分

講演：手稲前田の地名にもなった

加賀百万石前田藩第15代当主が拓いた前田農場(茂内義雄氏)

札幌の奥座敷、一世を風靡した光風館(上仙学氏)

手稲の歴史を創った人達(野村武雄氏)

会場：手稲区区民センター区民ホール

## 手稲の地名とアイヌ語名と地形

手稲郷土史研究会相談役 野村武雄(富丘在住)

元手稲中央小学校教諭(現在札幌市博物館活動センター学芸担当課長)の古沢仁理学博士が『テイネ・イはどこに』の題で書かれたので紹介したい。

80年前、昭和の初期まで手稲山麓一帯に沿って散在したメム(池・沼)や湧き水は、宅地化と共に多くが姿を消した。昔の手稲の名産「スズラン、ワラビ、セリ、ふき」等も同じ運命をたどった。現在、「星置緑地」本町の「田村歯科医師邸の池跡」富丘の「ふくろう公園」「元製油工場乙黒邸の池跡」等に昔の面影が偲ばれる。会員各位の調査、発見も期待される。

### "テイネ・イ"はどこに？

(札幌市博物館活動センター情報誌「ミューズ・レター2013.12) NO.55号より

手稲という地名は、アイヌ語の「テイネ・イ=湿った所」を語源にしています。「湿った所」とはどこを指しているのでしょうか？

その謎に迫るには、まず手稲山から話を始める必要があります。手稲山から北東方向に広がる平野に向かって流れる川には「星置川」、「軽川」、「三樽別川」の3本があります。それぞれの川が手稲山を削りながら流れ、削った岩石を山のふもとに体積させ、小さな扇状地=崖錐を形成しました。自然の中では「小さな」規模ですが、そこを私たちが歩くと「なだらかな起伏」として感じられるほど大きなスケールです。このことは、国道5号を通過して、3本の川を越えるときに上り坂と下り坂を繰り返すことで体験できます。これら3つの崖錐が重なり合って1つになったのが「星置(複合)扇状地」です。

一般に扇状地は水はけのよい砂礫から形成されますが、扇状地より下流には細かな砂泥が堆積し、その上には湿地が形成されます。

星置扇状地は市内でもっとも海岸に近く、標高の低い土地に位置するため、地下水位が高く湿地になりやすい土地でもあります。そのため、水はけがよく乾燥した扇状地の末端に接するように湿地がありました。そこで「湿った所」という意味の地名でよばれるようになったのではないのでしょうか。現在、扇状地と湿地が出会う場所として「星置緑地」が残され、湿地特有の植物であるミズバショウが雪解けの頃に咲き誇ります(古沢)

\*礫とは直径2~256mmの石の粒を意味します。

